The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞ ワリーゥッラー著『フッジャトッラーフ・ル・バーリガ』前文・訳(付解説)
Author(s)	Shāh, Walīu'llāh; 加賀谷, 寛
Citation	大阪外国語大学学報. 1971, 25, p. 29-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80405
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ワリーウッラー著
『フッジャトッラーフ・ル・バーリガ』前文・訳(付解説)

加　賀　谷　　寛

Translation of the Preface of Shāh Walīu'llāh, *Ḥujjatu'llāhu'l-Bāligha*, with introduction and notes.

by Kan Kagaya

The *mujtahid*-like originality of the religious thought of Shāh Walī'ullāh has recently been reevaluated positively, especially by Indo-Pakistani scholars. Parallel to this tendency, Islamic scholars in Europe are attracted to his thought to widen their horizon of Islamic studies. In Japanese circle of Islamic studies, I have contributed articles to academic journals on his religio-social thought and also made a translation of the part of "*irtifāqāt*". I have a plan to translate the whole book of *Ḥujjatullāhu'l-Bāligha*, and the present one is that of "*dībāja*" of that magnum opus. This *dībāja* is followed by the "*muqaddima*". The work seems formally patterned on the general line of Muslim religious treatises, in doing so the author seeks rather for a justification to such a original one. The uniqueness lies in that it overcomes limit of the established *fiqh* works and aims at a rediscovery of the true meaning or God's intention (*ḥikma, asrār*) of the Ḥadīth. In my observation, a possible development of later Islam could only be achived through the subjugation of *taqlīd*. In this respect, the auther can be compared with the position of al-Ghazālī who denounced *fiqh* and *faqīh*, for the revivification of the basis of the *Sharī'a* system through chanelling the Sufism into it. In the case of Walīu'llāh, the supreme position of Ḥadīth after Qur'ān is reaffirmed and further he investigates into the "intention of God" in the original imposition of Sharī'a and finds a principle of "*sa'āda*" of human society, which surmises a natural, sound and normal human being. Thus we find the first sentence of this *dībāja* beginning with the word of "*faṭara*" pointing the specifi way of the creation of God. It is to be noted in a phrase of praising God in Muslim religious works the intention of the auther may be revealed through the first verb used to suggest the specific way of Work of God.

The present translation is based on the Arabic text edited by al-Sayyid Sābiq, published by Dār al-Kutub, Qāhira, n.d. Also I constantly referred to the Urdu translation by Mawlānā 'Abd al-Rahīm,Karachi 1962. Further, I referred to the "Ni'matullāh al-Sābigha", Karachi, n.d.

解　　説

ワリーウッラー（1703—1781）の宗教（改革）思想は，インド・パキスタンにおいて，最近とくに積極的な評価が与えられて，新しく注目を浴びている。欧米のイスラム研究者もこれを受け

て，J. M. S. Baljon をはじめとして，ワリーゥッラー研究がイスラム研究に新しい展望を拓きつつある。私はこれまで，その宗教・社会思想については，『西南アジア研究』19号（1969年，京大）に，またその社会理論（irtifāqāt）の部分の訳を，『イスラームの宗教思想にみられる社会組織論』（昭和44年，アジア経済研究所所内資料，調査研究部No.44—16）に発表した。その政治思想については，インド史研究会（1970年10月）に報告した。私はその主著『フッジャトッラーフ・ル・バーリガ』の全訳を志すものであるが，本稿はそのうち「前文」の訳であり，つづいて機会を得て，それを敷衍する「序論」（al-muqaddima）の訳に移る予定である。

この前文は形式的には，イスラムの宗教書に共通するパターンに当てはめられて，それによって justification を求めながら，類書のようにイスラム法学(fiqh)の枠内に止まるものでなく，イスラム法学の枠を超えるところにハディースの真の意図を見出すことを宣言している点で，後世イスラム思想上,類をみない画期的なものであろう。私の大胆な推論であるが，後世イスラム思想の発展は,そもそもイスラム法学の枠（taqlīd）を超える見解をもつことができるかどうかに,かかっているということに尽きるであろう。この点から，本書はイスラム法学の在り方を非難して，イスラム法の基礎にスーフィズの流路を通じさせて，イスラムの宗教体系に宗教的生命を与えたアル・ガザーリーにも対比することができるであろう。ワリーゥッラーの場合，ハディースの位置を宗教体系の基礎に再確認し，しかもハディースを制定した神の「意図」を問うことに始まり，その「意図」に，「人間の物質的，精神的幸福のため」という原理を一貫して発見しようとしている。その説によれば，ハディースは本来的なノーマルで普遍的な人間とその社会を前提として，たてられていることになる。本前文の冒頭にあらわれる，神による人間創造の仕方を示す faṭara の語には，このような意味がこめられていると解すべきであろう。一般に，宗教書はその冒頭における神の賛辞において，神の創造の特定の意図を明示する仕方で，著述の動機，目的が示唆されると私は解するものである。すなわちアル・ガザーリーの場合，al-ḥamdu li'llāh alladhī aḥyā 'ulūm al-dīn とあり，本書の場合には，al-ḥamdu li'llāh alladhī faṭara al-anām となって始まっているのが注目される（下線は本解説者による）。

本訳のテクストルは，al-Maṭba'at al-Amīrīya の版に基づく al-Sayyid Sābiq 校注によるアラビア語版（以下 A. と略。Dār al-Kutub al-Hadīṯha, al-Qāhira）n. d. を用いた。これを底本としながら，定評ある Mawlānā 'Abd al-Raḥīm 訳のウルドゥ版（以下U. と略。2nd. ed. 1962, Qawmī Kutub-Khāna, Lahore）を参照した。さらに "Ni'matullāh al-Sābigha" と題されるMawlānā Abū Mḥd. 'Abdul-Ḥaqq Ḥaqqānī のアラビア文対照のウルドゥ訳本を参照した（以下とN.略。1885年発行の再版 Nūr Mḥd., Karachi)。

〔訳文〕

慈愛ふかく慈愛を垂れるもの，アッラーの御名をもって〔謹しんで本書を始める〕

〔神の賛辞〕イスラムの宗教 millat al-islām と直き道への導き al-ihtidā' に合わせて人間に本性を賦与下さり faṭara al-anām 彼ら人間を明快で，まぶしく輝しい，本来純な宗教 al-millat

al-ḥanīfīya〔N. al-ḥanafīya〕[1] に基づくように形づくられた jabala-hum アッラーに賛えあれ。

〔予言者の派遣〕それにもかかわらず彼ら人間たちは，自ら蒙昧 jahl に堕ちこんで，もっと卑しい状態になった。このようにして彼らは苦しい目に遭った。そこで神は彼らに慈愛を賜わり raḥima, 恩恵を賜わり laṭafa bi-him, 彼らに諸予言者 al-anbiyā' を派遣して，暗黒 al-ẓulmāt から光明 al-nūr に向けて，狭苦しいところから広々とした場所に脱出させようと配慮なさった。また神に対する服従 ṭā'at がそれら予言者に対する服従に結びつくように配慮された。神が彼ら予言者に賜った地位は栄誉に満ち，偉大なものである。

〔宗教の学問の地位〕神は自らの意志によって，諸予言者に従うものの一部に，それら宗教の学問を担わせて，そこに含まれるシャリーアの真の在り方 asrār sharā'i' を理解できるように配慮なさった。神の恩寵によって bi-ni'matullāh それらのものがシャリーアの真の意味 asrār の保持者となり，道を照らす燈火を掲げるものとなった。彼らはきわめて高い地位に属し，〔U. 彼らは予言者の代理人の地位を誇り〕，彼ら一人一人の徳 faḍl は千人の熱信徒 'ābid にも優越するほどである。このようにして彼らは天界で偉大なもの 'uẓmā' とよばれる。このようにして全被造物が，水中の魚にいたるまで，彼らに〔神の〕祝福を祈願する da'ā までになる。神よ，天地が続くかぎり，彼ら〔予言者〕と，その継承者 warathat-hum〔宗教の学者〕のうえに祝福を恵み続け下さいますように。彼らのなかでも，とくにわれわれの頭首 sayyid-nā で，神から歴然としたシルシ al-āyāt を与えられたマホメットに祝福がありますように。マホメットのために最高の祝福と最高の祝詞を希求し奉る。ならびにその一族 āl とその教友 aṣhāb のうえに神が恵み riḍwān をふんだんに大雨 shābīb のように降らせて，彼らに最高の報い aḥsan al-jazā' を与え賜わんことを。

〔ハディースの学の地位〕さて〔一連の賛辞につづいて〕神の慈愛 raḥma を切に求めるこの信徒，すなわちアブドゥル・ラヒーム 'Abd al-Raḥīm の子で，ワリーゥッラー Walī'ullāh と通称されるこのアフマド 'Aḥmad は—— 神よ，父とこの自分に偉大な徳 faḍl を賜わりますように。また死後には至福の天国に住まわせ給え——つぎのことを宣べる。およそ宗教諸学の体系 al-'ulūm al-yaqīnīya のなかでもっとも主要で，それらの最高の地位にあり，それから派生する諸学 al-funūn al-dīnīya〔とくに法学を指す〕の基礎を成す基本は，ハディースの学 'ilm al-ḥadīth である。その学問は，諸予言者 al-mursalīn のうち，もっとも徳にすぐれたもの〔マホメット〕——そのうえに，またその一族のうえに，またその全教友のうえに神の祝福がありますように——から発したもの，すなわちその明言 qawl, その行為 fi'l, その黙許 taqrīr を取挙げるものである。これは暗夜のなかの燈明 maṣābīḥ al-dujan で，道を示す指針 ma'ālim al-hudan であり，譬えるならば満月の明るい光にも較べられる。

したがってハディースを心に留めて，実践するものは，正しい導きを賜わり，多くの恵み al-khayr al-kathīr を与えられる。それに対して，それに背くものは，直き道を誤まり，とりかえしのつかない損害を自らのうえに招くことになる。なぜならばわれわれの予言者は積極的命令

amr と禁止 nahy を明白になされ，同様に警告を示し andhara, よき報せをもたらし bashara,〔宗教の真理を説明するために〕譬えをもって教えられた ḍaraba al-mithāl からである。まことにそれらのハディースは，コーランに〔N, U,「量的に」〕並ぶもので mithl al-qur'ān, ないしはコーランよりも〔N, U,「量的に」〕多い aw akthar 。

〔ハディース学の分類〕さてここで，つぎの点を明らかにしておきたい。それはこの学問にもいくつかの階梯 ṭabaqāt があり，同様にハディース学者のあいだにも，いくつかの等級 darajāt がみられるということである。このようにしてこの学問にも表面の部分に当るものと，その内面の真髄 lubb の部分に当るものとが見別けられ，あるいは貝殻に当る部分と，その内部の真珠玉 durr の部分とが見別けられなければならない。このハディース学の多くの部門 abwāb については，ウラマーが——神よ彼らに慈愛を賜わりますように——著作しているとこであり，それらによって難問の解答が容易に得られるようになっている。

これら諸部門のうち表皮に当る部門から言うならば，はじめにハディース伝達の確実性 ṣiḥat と不確実性 ḍa'f とを識別し，その伝達の連鎖を精査して，連鎖に欠陥がないかとか，それに該当しないがどうかを知る学である。この学問には熟達したハディース学者 jahābidhat al-ḥadīth と，初期の世代のハーフィズ al-ḥuffāẓ min al-mutaqaddimīn が取組んできた。

これに続いてハディース学の第二の部門として，意味不明であったり，難解なハディース文の箇処を読解する部門があり，これには文学の巨匠たち a'immat al-funūn al-adabīya とアラビア語学者の碩学 al-mutaqqinūn min 'ulamā' al-'arabīya が取組んで来た。

ハディース学の第三の部門として，シャリーアの意味を明らかにする学 fann ma'ānīy al-shar-'īya があり，これは個々の法的規定 al-aḥkām al-far'īya を導き出し istinbāṭ, 明言された規定から明言されない事柄を類推 al-qiyās し，比喩と示唆による論証の確立 al-istidlāl bi-al-īmā' wa al-ishārat を試み，削除されるもの mansūkh を疑念の余地のないもの al-muḥkam から識別し，より好ましいものを出過ぎて邪魔になるものから見別ける学である。これはウラマー一般の意見では，ハディース学のなかでも真髄に当ると考えられており，法学者 al-fuqahā' のうちで学問的論議に取組むもの al-muḥaqqiqūn がこれに取組んで来た。

しかし私の考えではハディースの諸学 al-funūn al-ḥadīthīya のなかでも，もっともデリケート adiqq な分野は，宗教の内的意図 asrār al-dīn の学であり，もっとも学的奥義を究めるもので，その根本にいたるもっとも深い学問であり，もっとも高い塔であり，私が見渡したところ他のすべてのシャリーア諸学 al-'ulūm al-shar'īya に優越し，もっとも高い地位を占め，もっとも重要な学である。この学は〔ハディースにあらわれる〕法的規定に含まれる知恵 ḥikma を解明し，それらが規定されるにいたった諸々の理由，ならびにある特定の行為をとることによって生ずる物質的・精神的なかくされた神の配慮 asrār を論じ，その要点を明らかにするものである。これこそ，まことに神によって学者としての能力に恵まれたものによってだけ，しかも彼が宗教的義務を履行したのちに，自分の貴重な時間を十分これに注入して，自分の来生に備える善業として形

成される，もっとも価値ある学問 aḥaqq al-'ulūm である。この学によって人間はシャリーア al-shar' の真実の在り方に開眼するようになる。

この学と，シャリーアの伝承 akhbār とのあいだの関係は，丁度，韻律学に巧みなもの ṣāḥib al-'arūḍと〔その詩才の結晶である〕詩集 dawāwīn al-ash'ār とのあいだの，あるいは論理学者 ṣāḥib al-manṭiq と〔その完璧な〕論証 barāhīn とのあいだの，あるいは文体論家 ṣāḥi bal-naḥw と〔その〕アラビア語の名文章 kalām al-'arab al-'urabā' とのあいだの，あるいは法学原理の学者ṣāḥib uṣūlal-fiqh と〔その〕精緻な法学の末梢 tafārī' とのあいだの関係のようなものである。

この学問のお蔭で，人間は暗夜に薪木を集めたり〔N. 夜では湿った木の見別けがつかないことを指す〕，水流に入って〔N. なにも見別けがつかない〕潜水夫となったりするようなことをなさなくて済む。同様にしてこの学問に通じたものは，前方が見えない駱駝のようにつまずくこともないし，めくらの馬を乗馬用にするようなこともなさないで済む。人間がよく錯誤をするのは，譬えるならば，ある病気にはリンゴを食べると効くと医師が言うのを，はたで聞いたものが，愚にもハンザラ al-ḥanẓala〔coloquintida〕の実が外見上似ているので，リンゴから類推して，病人に食べさせるようなものである。それに対して，この学問に通じている信徒は，神の側から明白な視力が与えられていて，はじめは人々が言うように毒物は命取りだと盲信して，それを避たが，やがて毒物のもたらす効果が，過度の熱と乾燥 yabūsa の二つであり，したがって人間の気分 mizāj al-insān に異和するものであることを実際に知る 'arafa ようになる。このようにして自分がすでに信じていたことのうえに，さらに新らしい確信と納得が得られることになる。〔U. この場合，彼が毒物を避けるのは，たんに外的権威 taqlīd に拠るのでなく，その個人自身の洞察力によるのであり，前者に基づく確信は容易に崩れるが，自身の洞察力による確信というものは確固としている。〕

〔著者の執筆意図〕さて予言者のハディース aḥādīth al-nabī はその基礎 uṣūl についても，末葉の部分 furū' についても確立しており，また予言者と同時代の教友とその直後の世代 al-tābi'īn の所産 āthār も，全体にわたっても細部についても，確認されてきた。またムジタヒド al-mujtahidīn はシャリーアの諸章 al-abwāb 別に，シャリーアの制定に当って考慮された利益 al-maṣāliḥ al-mar'īya を注意深く究明した。同様に彼らの弟子の学者 al-muḥaqqiqūn min atbā'i-him は要点を提起したし，またその弟子に当る精妙さを求める学者 al-mudaqqiqūn min al-ashyā'i-him が多くの成果を公表してきたところである。したがってこのハディースの学について論議することは——これを実現させた神に賛えあれ——イスラム教徒社会のイジマー ijmā' al-ummat にいささかも反する行為とならないし，まただれもこの学問を愚かなことと敢ていうものもいないはずである。

しかしこの問題について著書を編纂したり，この基礎づけについて熟考したり，この原則と適用の問題を確立したりしたものはきわめて少いし，真に意が尽されていて，それを読むものが十分その利益に与れるようになっていたり，学問の渇望が充たされたりするような業績が挙がって

いる例は，はなはだ少い，この学問状況にはつぎの諺がよくあてはまる。『汝が〔さきに〕獅子にまたがったとき，汝の後方に一体だれが一緒に乗りたがるものがいるだろうか』

ハディースの内的意図 asrār を解明できるための資格として，すべてのシャリーアの学の奥義に通じていることとならんで，すべての形而上学 al-funūn al-ilāhīya に並すぐれて通じていることが挙げられる。またこの学について論述することのできる条件は，神によってその学者の胸がデリケートな学 'ilm ladanī のために切開かれて，その心が秘義の理解力を備え，無垢の状態で充たされていることである。これとならんで，精神活動の鋭敏さ，頭脳の回転の良さ，筆と弁の流暢さ，人を驚嘆させる力と人を惑きつける力に優れることがこの学問に取組むものに必要とされる。さらにこの学問を論ずるものは，基本原理をどのようにして立てるか，またそのうえに末葉をどのようにして演繹するかとか，一般法則 al-qawā'id を立てて，それに基づいてどのようにして全学問体系 al-ma'qūl wa al-masmū' に証拠となる言 shawāhid を成立させるか，を心得ていなければならない。

神の偉大な恩寵として，神が私に対して〔この学問をする〕特別の幸運を与え，〔そのための〕使命を賜わった。しかし他方，私はつねに自分の欠陥を告白し，認めるものである。コーランに〔ヨセフの言として〕言う。「私は自分の心が決して誤謬から免れているとは言わない。なぜならば心 al-nafs というものは本来放縦なことをするようにと人を仕向けるものであるから」〔ユーセフの章53節〕

〔著者の神秘体験〕ある日のこと，午後の礼拝を終って，神に向かって精神統一して瞑想していたとき，突如として予言者の聖なる霊 rūḥ al-nabī[2] が私の眼前にあらわれた ẓaharat。これにともなって私は気を失なったようになり，上から一枚の布が私に覆せられたように感じた。この〔トランスの〕状態にあったとき，私の心 rū' に，これは宗教 al-dīn をある特殊な仕方で説明するようにという御指示であるということが囁かれた nafa<u>th</u>a〔A. nafa<u>kh</u>a（息を吹きつける）〕。このとき私の胸中に一つの光明 nūr があらわれ，それがますます光輝を増していくのを私は見た。

このしばらく後に，神はつぎのような啓示を私に与えた alhama-nī rabbī.[3] それはこの偉大な任務のために，いつの日か立上るように召命されることが私の運命として天上の筆をもって書き定められていることを告げるものであった。このとき地上のすべてが主の光明で輝き出したように感じられた。それはちょうど日没のとき，太陽の残光が輝き出して，光線 al-aḍwā' を地上に反射しているのに似ていた。いまやマホメットのシャリーアの al-sharī'at al-muṣṭafawīyah が完璧な論証 al-burhān のかたちをとって，あらわれて輝きわたる時が到来したと私に告げられたように感じた。さらにこれに続いて，私は夢で二人のイマーム，アル・ハサンとアル・フセイン——神よ二人を嘉したまえ——が折しもメッカにいた私のまえにあらわれて，私に一本のペンを賜って，このペンはわれわれの祖父の予言者のものであるという御言葉を賜った。この召命があってから，私はこの学問について，初心者にとっては洞察力が養われるような，熟達者にとってはその顧慮

が必要とされるような，また私の〔講義に〕出席するものも，出席しないものも等しく利用されるような，また人々の集会 al-majlis で皆に読まれて，みながそれに依拠できるような冊子 risāla を書こうという気持が起った。

しかしながら著述に当って，必要なときに，私の周辺にいて私の疑問を解決してくれるような信頼できる学者がいなかったし，私自身についてもシャリーアの学問 al-'ulūm al-manqūl を深く身につけているわけでない点を考慮して，私はためらい，著述にとりかかることができなかった。さらにこの時代には，イスラムが忘れ去られ al-jahl, 小集団間の対抗 al-'aṣabīya が根を張り，利己心のとりことなり aṭbā' al-hawā', 各人がそれぞれ欠陥ある見解 ārā' を誇示しているのを見ると，私は一層憶病になった。また〔ある相手と〕同時代であることは，その相手に嫉妬心を懐かせる原因になる al-mu'āṣiratu aṣlu al-munāfiza と言われており，ある著作をなすものは〔攻撃の〕矢面に立たされる man ṣannafa fa-qad istahdaf. とも言われている。

このように私が躊躇していたとき，私の偉大な兄弟で，親愛な友ムハンマド，通称アーシク 'Āshiq が，この学問の大切なことを悟り，この学問なしには幸福 al-sa'āda に完全に恵まれることにならないと悟った。彼はまたこの学問が懐疑を克服した末に得られるもので，見解の対立に耐えることなしには得られるものでないことも，彼は悟った。彼は有能な人物の指導なしにはこの学問を成就できないことを知った。そこで彼はこの学問を求めて，できる限りすべての国々を巡って，そのような人物を求め歩いた。いろいろの人と遭って議論し，その真価を検査したが，すべて徒労に終った。そこで彼は〔私の説得に〕一生懸命になり，私に喰い下り，私を摑えた。私が彼の頼みを断るたびに，私にイルジャームのハデースを示した〔ḥadīth al-iljām. U. なんらか既知の事柄について人に質問を受けたとき，それを知らないと答えて隠したものは，審判の日に火刑に処されるというもの。Abū Dāwūd, Al-Tirmidhī〕。彼は私のいかなる口実をも封じて，ついに私が疲れ果てて，これ以上逃れることができないようにした。そこで私はこれまで自分に啓示されたものが，ついにこのような形をとってあられるものであったことを知った。また〔神が〕コーランを私よりもすでに先行させて，あらゆる点からこの学問に対して関心を払うように命じられたことも改めて知った。

ここでは私は神に向かって精神統一し tawajjuhtu ilā 'llāh 神の加護を祈願し istakhratu-hu その助力を切に求めた。こうして私は自分の力を全く抜いて kharajtu min al-ḥawl wa 'l-quwwat bi-'l-kullīya, 私は死者が遺体洗浄者 ghussāl の手に委ねられているのと同じ状態に入った。

このようにして彼が私に懇願した事業に私は着手した。神にうやうやしく対して，心を快楽から離れさせて，ものごとが真にありのままに見えるように，心が正しくなり，文章が流暢になり，すべての問題について正しく当てはまる力を賜わり，私の意図を実現するうえで助力を賜わるように祈願した。まことに神は身近におわしまし，願を叶えて下さる方であらせられる。

私はまた彼につぎのようにも述べた。私は講演会の席では唖で，競馬競技場では跛馬のようなもの〔愚かもの〕である。私〔の学問〕は，肉塊でなくて骨をしゃぶるだけで満足しているよう

なもの〔貧弱そのもの〕であると。また私は余りにも多忙で心が落着くときがない。このようななかでは，先学の著書のページを繰って注意深く参照するようなことは，私にとって不可能である。私には〔学者たちの〕語ったことばを完璧に記憶する力もないし，すべてのものごとを流暢に話せるだけの能力もない。結局，人は自分のすることしかできないではないか。たとえに言うように，人は自分の墓穴の土には自分しかなることができない。私の生は限られており，しかも私は運命のままに委ねられているにすぎず，私は自分に〔運命として〕降されたものに拘束されている身であり，手近に得られるもので私は満足する。このような意味で，この拙書に満足するものにとって，これですでに文句のないものであろう。それに対してこれ以外になお多くを求めようとするものは，自分で好きなように〔著作する〕自由があると言うものだ。

〔本書の題名の拠りどころ〕〔本書の目的は〕神から〔法として〕課されたもの al-taklīf と，神の罰 almujāzāt の秘義 asrār と，シャリーアの秘義の解明にあり，この御指示が「最後のきめ手はアッラーのもの」fa li'llāhi 'l-ḥujjatu 'l-bālighatu〔A. al-An'ām 章の149節〕の句に示された以上，本書もその顕著な一つのあらわれであり，地平線から昇るその輝かしい満月であるとすると，本書の題名を Ḥujjatu'llāh al-Bāligha とすることが至当であると考えられる。神助があれば，人は最上の代理人 na'm al-wakīl となることができる。至高な神の介入なしに，いかなる力も偉大な勢力となることはできない。

注(1) "pure, orthodox" の意。 Cf. art. HANĪF, *Shorter Encyclopaedia of Islam*, Leiden 1953.（以下SEIと略す。）

(2) Art. NUR MUHAMMADI, SEI.

(3) 予言者が神から接受した啓示は waḥy とよばれ，それ以外の霊感（インスピレーション）は，ilhām として区別される。